２年ぶりに開催されたインターハイに参加して

大　西　　浩（(公財)全国高等学校体育連盟登山専門部顧問・長野県大町岳陽高校教諭）

新型コロナウイルスの影響で、昨年度（2020年度）は実施できなかった全国高等学校総合体育大会（インターハイ）登山大会が、８月19日から23日にかけて、福井県勝山市を舞台に２年ぶりに開催された。私自身、２年前の宮﨑大会を最後に８年間務めた全国高体連登山専門部の役員を退任し、もう参加することもあるまいと思っていたが、幸い生徒に恵まれて、長野県の代表権を得て、監督という立場で参加することができた。

今年の大会は、新型コロナウイルスの感染に配慮した結果、日程を一日短縮し、従来３日間行っていた登山行動を２日とし、感染リスクのある炊事については行わない、また幕営審査はするものの、宿泊はテントでは行わない、というこれまでとは大きく変容を迫られた大会となった。また、大会に参加するにあたっては、２週間前からの健康チェックの徹底、コロナ対策に関わる装備の携行が義務付けられた。これまでも大会期間中は毎日の健康チェックカードの提出はあったが、今年は今までの形式とは異なったコロナ対応の健康チェックが毎朝毎夕（出発前、宿泊地帰着後）の１日２回実施された。大会直前になって、第５波と呼ばれる蔓延が全国的に広がり、大会関係者の皆さんは開催にかなり危機感や不安感を持ち、神経を使った対応を迫られたことだろうと推察する。もちろん、参加する側とて気持ちは同じであった。大会に先立つ監督リーダー会議の中で、全体を統括する地元福井県の登山隊長から、「昨年度できなかった思いを胸に、コロナ禍における安全な大会を実施するという強い思いをもって、準備に準備を重ねてきた。」とのコメントがあった。

基本的に全国すべての県から10名の選手監督（男子選手４、女子選手４、監督各１）が集うインターハイは、選手団だけでもおよそ500名、大会役員も含めれば1000名規模の全国大会であったが、コロナも含め、大きなトラブルもなく終わった。そして、大会終了後も関係者からはコロナ感染者が一人も出なかった。

盆が明けてからの大会だったため、私の勤務する大町岳陽高校では大会会期中にすでに夏休みは終了して、授業が始まっていた。しかし、大会開催地の福井県が長野県の指定する往来自粛の対象県になっていた関係で、私たちインターハイに参加した生徒・顧問は、帰宅した８月23日から５日間の隔離を求められ、登校禁止となり、帰宅５日後の28日にPCR検査を義務付けられた。当然、その費用は県が負担したが、このような対応をしている県は、全国の中でも長野県のみだったように思う。その点では、長野県の取り組みについては、一定の評価はできるのではないかと思う反面、他県については無防備であり、そういった対応が実はこの時期に蔓延していた第５波の状況を象徴しているような気がした。

日本海に近い北陸地方の山の蒸し暑さは信州のそれとは違ううえ、標高も低い山（最高でも1307m）での大会とあって、暑さ対策には万全を期して大会に臨んだが、盆明けで少しずつ秋の気配が漂い始めていたこともあり、思っていたほどの暑さでなかったのは幸いだった。また、大会前に停滞していた秋雨前線も消え、天候にも恵まれた大会となった。

冒頭記述した通り、私自身2019年度まで過去８年間は本部役員として運営サイドの役回りで参加してきたが、監督として参加するのと本部役員として参加するのでは、全く視点が変わるため、大会の見え方も今までとは違ったものになる。以下、Ｂ隊（女子チーム隊）の監督として大会に参加した感想を記述してみたい。

大会中は、感染予防の観点から炊事が一切できないことを前提として開催を決めたため、朝夕の食事は大会本部が提供する弁当であった。その食事もソーシャルディスタンスを確保した決められた場所で摂ることが義務付けられた。バランスの取れた食事ではないにしても、女子選手にとっては落ち着いて食事ができたことは大会中の精神面、肉体面に一定の効果はあっただろう。登山行動の１日短縮も生徒にとっての負担の軽減にはなったに違いない。また、Ｂ隊の場合、宿舎も青少年自然の家ということで、テント泊に比べれば恵まれた環境であり、睡眠環境が十分に保障されていたこと、加えて入浴もできたためだろうか、大会中のトラブルは過去数年の大会からすると格段に減った印象（注１）である。

この一年間のコロナ禍の下での部活動の中で、テント生活ができていた学校はほとんどなかったはずである。したがって従来通りテントでの宿泊生活や炊事などをしていたとすれば、こうスムーズにはいかなかっただろう。

しかし、大会運営やコロナ感染のリスクを考慮してこのような措置を取らざるを得なかったとはいえ、これが大会のスタンダードな姿になっていってしまうことにはいささか違和感を持った。

これまでの大会は、入山（開会式）から３泊４日の登山行動を総合的に審査するものであったが、１日分をカットすることで、そもそもの心構えが大きく変わってしまった。実際の登山活動においては、２泊３日の縦走と３泊４日の縦走は、たかが１日違いということではない。実際に経験したものならわかるが、この１日の違いは質的に大きく異なる。インターハイが高校の安全登山のスタンダードであり、目指すものを示していると考えれば、この１日の日程短縮ということは、その形を大きく変えることにつながる。

審査のために幕営はするものの実際には宿泊しないこと、炊事ができないため付与点が与えられること、宿舎（Ａ隊は体育館）での宿泊、食事の支給、こういった今までにない形を見て、古い話になるが、1980年代から90年代前半に国体山岳競技が変容していくありさまとダブって見えた。今ではスポーツクライミング競技へと完全に姿を変えてしまった国体山岳競技だが、最初の頃はインターハイの登山競技とあまり差がなく、同じような競技だったと聞く。当然その名残もあって、私が直接かかわった1990年代初めのころは、少年の部では縦走競技２日、踏査競技１日で行われていた。当時は国体でも天気図審査があり、付与点に近い形ではあったが計画書の審査も装備審査もあった。もともとの国体山岳競技は、テント生活下での競技で、幕営審査も装備審査も課題テストも今のインターハイと似たような形であった。それが競技の客観化、見える化の過程で次第に形骸化していき、旅館での宿泊となり、90年代にはかろうじて天気図と計画書だけが審査項目として残っており、おもに体力を縦走競技で、読図力を踏査競技で競う形に変わっていた。2000年代になって少年にも登攀競技が導入され、踏査競技、縦走競技が順次廃止され、最終的には登攀競技が人工壁でのスポーツクライミング競技へと変化し、国体山岳競技とインターハイ競技とは同じ祖先から枝分かれしたものの異なった進化をたどった、全く非なる物となってしまった。先に述べたように、今年の大会では、い

わゆる生活技術の審査がこれまでとは大きく変わった。登山における生活技術とは、とりもなおさず「テント生活」における技術を意味する。そしてこの「テント生活」というのは、高校山岳部の生徒にとっては大きな楽しみであり、登山文化を象徴するものであるといっても過言ではない。カンカンに照らされた日も、ずぶ濡れになった日も、風に吹かれた日も、停滞で動けない日も、「テント生活」は文字通り同じ釜の飯を食べながら、疲れた身体を休め、友との絆を深める貴重な場である。

コロナが今後どのような形で私たちの登山活動に影響を及ぼすかは見通せず、今回の大会が新たな形での大会へのターニングポイントになるのかどうかはわからない。しかし、もしこのまま設営炊事という生活技術に関わる部分の方式が変わっていくと、単なる審査のための幕営となり、付与点であるが故に炊事の際の安全性は失われ、生活技術に関する部分については、全く絵に描いた餅のような笑止な大会となってしまう。

だが、問題は大会だけにとどまらず、現実はさらに深刻である。この一年半、コロナ感染対策のために出された登山医学会等の「ソロテント推奨」の方針から、高校山岳部のテント生活に対しても制限（注２）がかけられ、高校山岳部の一番の楽しみであるテント生活が、これまで通りには行えない状態が続いている。インターハイに参加した各県の監督と話をしていても、コロナ禍の現状において、「テント生活をさせてあげたいけれど県から許可がおりない。」、「感染に対する不安があるので日帰りしかしたことがない。」、「やむを得ず山小屋泊での合宿を組んだ。」、「幕営は練習のみでテントで寝た経験はない。」、「山中での炊事はしたことがない。」などの切実な声を聞いた。高校山岳部という登山文化の消滅を危惧する。

健康チェックのより厳格な実施、ワクチン接種の普及、PCR検査の実施なども踏まえて、生徒たちが同じ釜の飯を囲んで、一日の山行を振り返り、友と明日を語るテント泊ができるような方向性を探りたい。何人かの先生とそんな話をした。

ともあれ大会は終わった。参加した本校の生徒たちは、「コロナ禍で大会中止も危ぶまれる中で自分の代で最後のインターハイに出場できたことは部活をやってきた中で一番嬉しかったです。」「福井入りして一番驚いたのは、運営スタッフの多さ。家族や部員、友人から応援してもらっている上、さらに大勢の方に支えていただいたことで、最後までくじけられないなと思って、頑張り抜くことができました。」「初めてインターハイに出場し、一番違和感があったのが県名で呼ばれることでした。学校名で呼ばれることに慣れているので、『長野県』と呼ばれた時は私たちが長野県代表で来ているんだと実感しました。チームのみんなで助け合い、無事に楽しく帰ってこられたことが一番よかったことだと思います。」と、多くの方々の支えで実現した大会に出られた喜びを素直に語ってくれている。この思いは全国から参加した選手たちに共通するものだろう。

厳しい中で開催に向けて尽力されたすべてのみなさんには、改めて厚く感謝を申し上げたい。それとともに、次年度以降の大会が高校山岳部の活動の目指す姿に少しでも近づくような形で開催されることを強く願うものである。

注１）インターハイ登山競技における医療的安全管理（大西浩、大城和恵）登山研修VOL33-2018
山岳看護視点による高校安全管理サポート（浦川陽子）登山研修VOL35-2020

注２）コロナ禍の下での高校山岳部の活動（大西浩）登山研修VOL36-2021